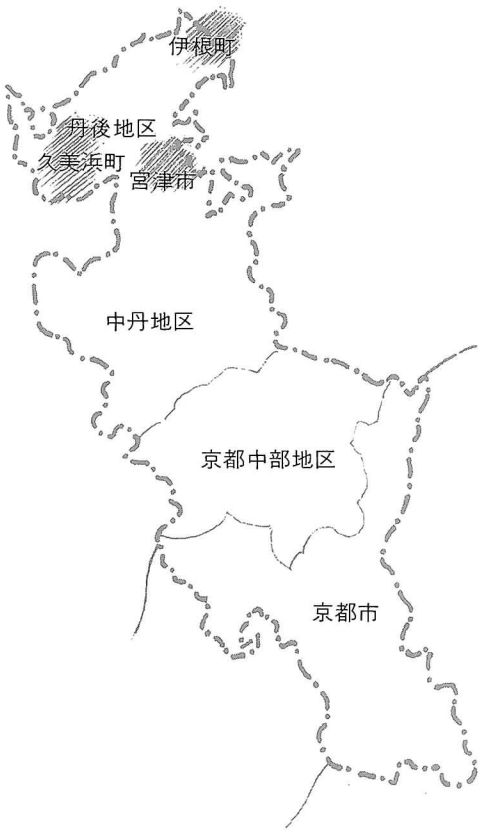
京都府 宮津市、伊根町 久美浜町

陸の孤島・丹後の寺 再生への道は



《衰退する丹後》京都府下でも、日本海に面し、かつて海運やちりめん織りで栄えた丹後地方は、産業が停滞し、農業・漁業離れによる離村、転業によって過疎化が進んだ。

海運の発達で繁栄し、享保年間（一七一六―一七三五）に織物の技法が移入されて、ちりめん産業が発展した宮津を中心とした丹後地方に、時を同じくして京都の妙顕寺や本圀寺が競って教線を張ってきた。法論によって他宗を改宗させ日蓮宗になった寺院が三一もある。その多くが、もともと檀家数の少ない上に、地場産業の低迷による住民の流出によって、宗教活動はもちろん、寺院の維持も難しくなってきているのである。

今回は、最近宮津市に合併された地域、及び与謝郡伊根町と熊野郡久美浜町を調査の対象地区とした。

かつて、栄えて「**財布が空（から）となる**」と詠われた宮津市は、昭和四〇年以降一〇年間で一万人の人口が減った。いまでは近在の村々を吸収合併して辛うじて三万人の市政を保っている。天の橋立や丹後半島の景観など観光に力をいれているものの、地域の活性化にまではつながらない。

また、長い間ちりめん業が盛んではあったが、それは農家の飢えの苦しみのせっぱつまった要求から生れたものであって、中心的産業になり得ることもなく、いまなお零細家内工業のままである。昭和三六年、丹後の賃金水準は、全国労働力調査審議会が全国最低と折紙をつけるほど低かった。

地域衰退の為に、唯一の足であった旧国鉄宮津線はいまや廃止の対象となっている。

《人口減少に苦悩する住職》若者が農業・漁業を敬遠し仕事を求めて京阪神地区へ流出した状況の中で、住職は様々な努力を試みてきた。

住職の指導力の影響が大きいと語りながら寺を護っている檀徒。

宮津湾をはさんで宮津とは反対側に位置し、最近宮津市に合併されたこの地区は、半農半漁の土地柄である。また昔から住民の横のつながりの強いところでもある。

一五年前、荒廃したあき寺を年中行事のできる姿にまで復興した**A寺**では、檀家の減少でそれも思うようにできなくなってしまった。そこで人が離れていくのを防ぐ為、墓地の造成をやり、また、経済的基盤確立の為、多くの参詣者を期待して、住職が私財を投じて大きな宝塔を建立し、それを中心になんとか盛りあげていこうとしている。

江戸時代、八万人講があって祈祷寺として多くの参詣者のあった**B寺**、そして**C寺**では、土地柄横のつながりの密な檀家をまとめる難しさを体験しながらも、常に檀家に先祖の眠る寺を大切にすることを話すことによって、その結束でかえって寺が大切にされている一面がある。また文書伝道で、出ていく人との縁をきらないよう努め、住職は法務に専念、寺族が教職に就いて家族ぐるみで維持し、改宗もあって檀家が増えた、という。

また檀家二九戸で住職の結婚や荒行入行の費用を面倒みたが、結局住職が寺院を出てしまった**D寺**では、老人世帯のみの檀家となってしまい、寺院を維持する経済力もなくなり、住職を迎える意思もなくなってしまった。檀家は、対等の立場を条件に他寺院との合併を望んでいる。「**檀家の信仰心は住職の徳性や指導力の影響が大きい**」というこの寺院の檀家の声は、そこに教師がいてはじめて寺院の存在の意味があることを言い当てている。

過疎に直面している状況をどうするか云

云は、もはや信仰や伝道の問題ではないと断言する教師、そして地域の人々と共に働く場の設置を推進して、人の離れるのを防いでいる住職、教師もいる。そのことによって、寺院の存続の可能性を模索しているのである。

《寺務に専念して生活苦を脱皮》二足のわらじをはいた生活から法務に専念する生活に変えたら、生活の苦しさがなくなったという教師がいる。

丹後半島の中でも伊根町は、漁業を中心に早くから開け、京都府下最大の漁獲高を誇ってきたところである。

半島の漁村をめぐる船が唯一の足であったが、昭和三〇年代に半島をめぐる道路が開通して、かえって人口の流出がはじまった。昭和三八年の豪雪で流出に拍車がかかり、昭和三五年から五五年の間に四〇%を越える人口減をみた。老人の人口比率は一挙に二倍になった。今日でも漁業就業者の高齢化が問題になっている。

そんな厳しい過疎化のなかで、減少する檀家三〇戸と共に歩み、寺務に専念して生活苦から解放されたという住職がいる。他の職につき、霊断で相談ごとを受けたり、宗派を問わず、村の葬儀に出て何とか収入を得ようとしてきた。しかし唱題行脚をして妙見堂を建立してからは、村人の参拝や寺への出入りが多くなり、親戚関係の強い土地柄だけに、他宗の人との信者としてのつながりができ、それが収入源へとつながった。それからは生活苦もなくなり、住職の生活や信仰の在り方に檀信徒は応えてくれ、その意識は協力的になったという。しかし「いまの人達がいなくなるこの先を考えると、寺の存在は……」と悲嘆の声もでる。

ある寺では、五年前に住職がいなくなって以来、総代が朝夕の勤行をし、少数の檀家での維持は大変ながらも、力を合せて守っている。生活の保障はできないが、住職が常住してほしいと願っている状況に、いかなる援助が可能であろうか。檀家側の「住職を食べさせることは困難なので」という背景が、代務でよいという意識を生んでいるのも事実だ。

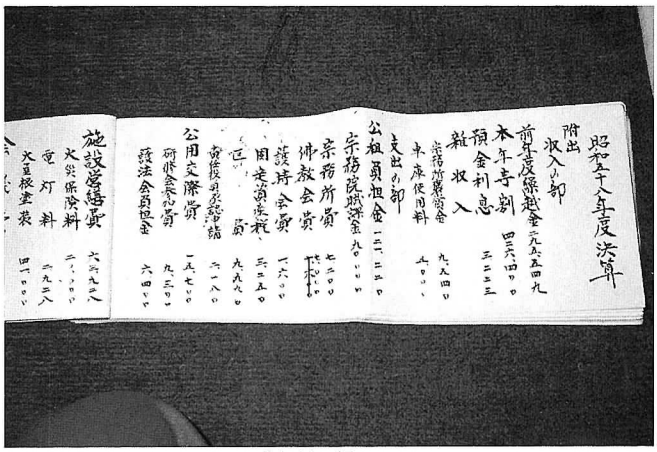
《宗教行事が寺院の収入に結びつかない》久美浜町もかつては二〇%の人口減をみた。

比較的農家が多いが、山陰本線の豊岡に近いため、通勤圏内の人々はとどまり、サラリーマンが多くなっている。いまは人口減少の悩みは少ないという。しかし長男は残り、次男以下や、若い女性達が都会へ出てしまい、嫁さがしに大変だという現実もある。また信仰心の薄い土地柄でもある。

他宗派も含めて、この地区には、檀家が住職をやしなっているという意識があり、檀家の生活がきびしかったためか、信仰以前の問題として布施を出さない習慣がある。住職はお経をあげにくるのが当り前という地域的風習があり、寺院の収入に結びつかない土地柄である。月回向もなく、年忌法要も簡単に行われ、住職が他の寺院の院代を勤めたり、京都の町寺へ手伝いにいったりして収入を得ている寺院が多い。

五〇戸の檀家が、無住時代に二五戸が他寺へ移り、その後、現住職が常住したが、やむなく京都の寺院へ手伝いに行って何とか収入を得ている。しかし、維持費は十分でないという寺院。

少数の檀家で現状維持



「寺割」帳

丹後の寺々は、少数の檀家ながら「寺割」と称する檀家負担割りの護持会組織で、かろうじて維持費が捻出されるのが大方である。先祖の眠る寺、皆の寺は皆で守っていく、合併してでも寺を失いたくないという意識は、どの寺の檀家にもある。

また、住職は恩給で生活していたが、病気で不在となり、昔からの十二日講を通して皆で守ろうと確認し合っている寺院、檀家七軒で毎月題目講を行い、維持は大変ながらも、宗祖七〇〇遠忌には、お堂を改修再建した、住職不在の寺院もある。布施だけでは生活出来ないから、他に職を求めるべきか悩んでいる教師もいる。

一方で、ちりめんが盛んであった頃と、それが不振になった今の檀家の生活に変化はなく、したがって寺院も変らないという声もある。

《まとめ》

檀信徒の生活が苦しいから、楽だからということが布施の有る無しにつながるのか。布施を出さない習慣があるとすれば、布施の喜びを知らしめる教化こそ、いま問われているのではなかろうか。

少数の檀家の上に今後成りたっていこうとする寺院の存続は、きわめて困難である。しかし住職の任務は、そこに住して法を伝えるためであり、その中心に寺が存在する。それ故、そこに教師がいなければ寺院の存在理由もない。この勤めがあればこそ、寺院の機能が活かされ、寺院の存続へとつながる。

過疎化の中で、居残った少数の人々を対象に、この機能をいかに活かすかが、丹後の寺院の課題である。